

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P6281 参照



※ P6282 参照



※ P6281 参照

2026.3
No. 787

目次

[大学の動き]

- 北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授らが京都府特別栄誉賞授与式に出席 6281
- 株式会社安藤忠雄建築研究所による「研究者宿泊施設」の寄付に係る記者説明会を実施 6281
- 2025年度京都大学高大連携事業 大学院生等(学びコーディネーター)による授業を実施 6282
- 京都大学このえ会主催第4回講演会を開催 6283
- KuSuKu クリスマス会(親子イベント)を開催 6285
- 第4回現役留学生と卒業留学生が繋がる会「教えて先輩!卒業後の進路、そのリアル」(presented by 在日タイ留学生協会)を開催 6286

[部局の動き]

- 京都大学国際シンポジウム2025「アジアにおける地球環境学の教育研究に関する国際シンポジウム:持続可能な食糧システムと生活の向上に向けて」を開催 6288
- 令和7年度京大関係病院長協議会定例総会を開催 6289

[寸言]

想定外を引き受けた先の景色 橋寺 由紀子 6291

[随想]

研究用原子炉の「式年遷宮」 名誉教授 川端 祐司 6292

[洛書]

「人は野球に夢を見る」 天野 良明 6293

[話題]

● 本学卒業生の畠山丑雄さんが第174回芥川賞を受賞 6294

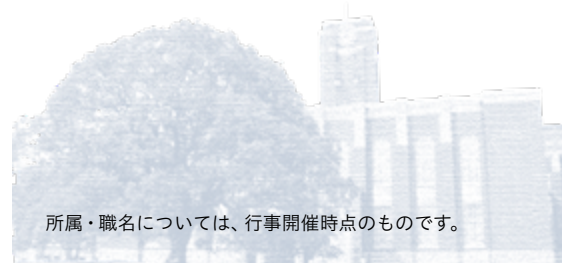
● 令和7年度広報連絡会を開催 6294

[訃報]

● 森澤 眞輔 名誉教授 6297



京都大学



所属・職名については、行事開催時点のものです。

北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授らが京都府特別 栄誉賞授与式および京都市名誉市民表彰式に出席

2025年にノーベル化学賞を受賞した北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授が、同年にノーベル生理学・医学賞を受賞した坂口志文 名誉教授（大阪大学特別栄誉教授）とともに、以下の栄誉を受けました。

■京都府特別栄誉賞

2026年1月27日に京都府より「京都府特別栄誉賞」を授けられ、京都府公館レセプションホールにおいて授与式が行われました。

授与式では、西脇隆俊 京都府知事より両氏に賞状ならびに副賞（西陣織額、摺漆 羽反汁椀：すりうるし はそりしるわん）が手渡されました。

次に、本学に対して感謝状の授与があり、湊 長博 総長が西脇知事より感謝状を受け取りました。

最後に記念撮影が行われ、和やかな雰囲気うちに終了しました。

■京都市名誉市民

2026年2月16日に、京都市より「名誉市民」の称号が贈られ、京都市本庁舎市会議場において表彰式が行われました。

表彰式では、松井孝治 京都市長より両氏に表彰状、名誉市民章ならびに記念品の楯が渡されました。

続いて、北川理事・副学長、特別教授らからの挨拶があり、参列した出席者から大きな拍手を受けて議場を後にしました。



後列左から臼井智彦 京都府総務部長、古川博規 京都府副知事、坂口教子氏、前列左から荒巻隆三 京都府会議長、湊総長、北川理事・副学長、特別教授、坂口 名誉教授、西脇隆俊 京都府知事



前列左から松井市長、坂口名誉教授、北川理事・副学長、特別教授、下村あきら 京都市会議長、後列左から竹内重貴 京都市副市長、岡田憲和 同副市長、吉田孝雄 京都市会副議長、吉田良比呂 京都市副市長

(広報室)

[目次に戻る ↗](#)

株式会社安藤忠雄建築研究所による「研究者宿泊施設」の 寄付に係る記者説明会を実施

本学は、株式会社安藤忠雄建築研究所から「研究者宿泊施設」の寄付を受けることとなり、2026年1月14日（水）に記者説明会を行いました。

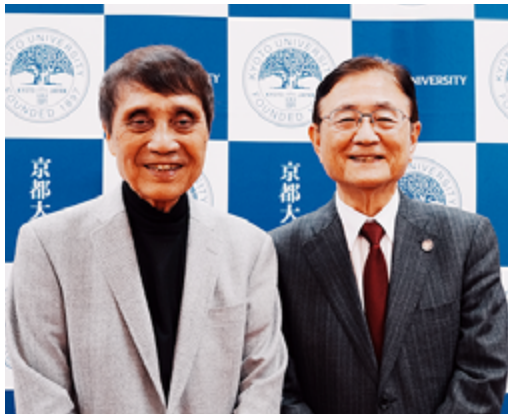
大学の
動き

本施設は、建築家 安藤忠雄氏の設計による建物で、本学医学部構内に建設後、寄付される予定です。

国際卓越研究大学構想の実現を目指す本学は、ビジョンとして「世界から多様な人材が集い新たな知を創造する国際拠点(ハブ)」となることを掲げていますが、本寄付によって快適に滞在できる質の高い宿泊施設が整備されることとなり、国内外の卓越した研究者が腰を据えて本学の研究者などと深く交流できる環境が整います。

さらに単なる「宿舎」を超えて、国内外の卓越した頭脳が交わり、新たなイノベーションが生まれるプラットフォームとなることが期待されます。

安藤氏からは、多様な背景を持つ人々が交流し、対話を通じて新たな世界を切り開いていく場となってほしいという本建物の設計に込めた想いが語られ、湊 長博 総長からは、今回の寄付に際し、安藤氏の本学の理念や教育・研究活動に対する深い理解と、格段の支援に対して、お礼が述べられました。



左から、安藤氏、湊総長



「研究者宿泊施設」の完成予想図(画像提供:安藤忠雄建築研究所)

(施設部(プロパティ運用課))

[目次に戻る ↗](#)

2025年度京都大学高大連携事業 大学院生等(学びコーディネーター)による授業を実施

教育改革戦略本部高大接続・入試センターでは、高大連携事業の一環として、全国の高等学校を対象に学びコーディネーター事業を実施しています。本事業は、本学大学院生(博士後期課程)およびポストドクターの協力を得て、全国の高校生を対象に研究紹介の授業を行うものです。高等学校における探究活動やキャリア形成等の支援、大学院生などへの教育機会の提供を目的として実施しています。

今年度は、82名の学びコーディネーター登録者の協力のもと、2025年9月2日(火)～12月19日(金)の期間に、出前(対面)授業およびメディア(オンライン)授業を全国49校で計86授業実施し、延べ5,633名の高校生が受講しました。

受講した高校生からは、「抽象的な課題から具体的な問いを探すことを意識したい」、「周囲に相談しながら視点を広げたい」といった探究の進め方に関する気づきが寄せられました。また、「歴史が生き生きと感じられた」、「これまでの“勉強”とは違う“学問”への期待が膨らんだ」との声もありました。文系・理系を超えて幅広い分野に触れる意義や、研究に伴う倫理的・社会

大学の
動き

的側面への理解が深まったという感想も多く、「自分が本当に学びたいことを追究したい」という前向きな意欲につながったことがうかがえました。

実施校の教員からは、「生徒と対話しながら楽しく講義を進めていただき、多くの気づきを得られた」、「疑問の広げ方や掘り下げ方など、探究活動に関わる示唆を多くいただいた」といった声が寄せられました。また、「研究者の発想プロセスを追体験できた」、「研究を楽しむ姿が、生徒が学びや将来を考える際の良い刺激になった」との意見もありました。

学びコーディネーターからは、「高校生が主体的に考え、意見を交わす姿が印象的だった」、「難しい内容にも前向きに取り組み、楽しさを見いだしてくれた」といった声が寄せられました。講義を通して、高校生が新しい視点を得たり、普段とは異なる角度から物事を捉える姿が見られたりしたことに手応えを感じたとのコメントもありました。さらに、「生徒同士の議論が活発で、多様な発想に触れられた」、「高校の先生方が生徒の新たな一面に気づく場面があった」との声も寄せられ、この取り組みが学びの広がりを生む機会となったことがうかがえました。

高大接続・入試センターでは、今後も全国の高校生に向けてさまざまな高大連携事業を展開していきます。



授業の様子 1



授業の様子 2



質疑応答の様子



個別質問の様子

(教育改革戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

京都大学ここのえ会主催第4回講演会を開催

「京都大学ここのえ会」(ここのえ会)は、本学出身の女性が学部や研究科の枠を超えて交流しながら、本学の男女共同参画推進事業や女子学生、女性研究者等への緩やかな支援を行う同窓会として2021年11月に設立されました。

大学の
動き

2026年1月31日(土)、東京にて第4回講演会が開催されました。同講演会は、ここのえ会を知ってもらうイベントとして、男女共同参画に興味のある本学関係者の女性であれば会員に限らず参加を受け付けています。今回は、現地参加者38名、オンライン参加者31名が参加しました。

冒頭、浅山理恵 ここのえ会長 (SMBC オペレーションサービス株式会社副社長) から挨拶があり、ここのえ会の説明や、登壇者や来場者への謝辞が述べられました。

その後、近現代美術史のキュレーターであり経営管理大学の客員教授も務める長谷川祐子氏による「アートと社会をつなぐ：キュレーターという仕事」と題した講演が行われました。講演では、長谷川氏が美術館や芸術祭での展覧会、アートプロジェクトを通してアートと人々をつないできた経験をもとに、アートの素晴らしさとキュレーションの意味について語られました。

講演会後には懇親会が開かれ、引き続き、多くの現地参加者が参加しました。会場内では会員・非会員が垣根を超えて交流し、講演に対するフィードバック、また、ここのえ会やこれからの本学の男女共同参画に向けた期待を語り合いました。

参加者からは、「展示する際のテーマや展示方法で、人への働きかけがこんなにも違うということを実感することができ大変興味深かったです」、「懇親会ではさまざまな分野で活躍されて



開会あいさつをする浅山会長



講演をする長谷川氏



講演会の様子



懇親会の様子



集合写真

いる方々とお話できて有意義な時間でした」などの感想が寄せられました。

このえ会はこれからもネットワークを広げ、本学の男女共同参画の推進に貢献していきます。

(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

KuSuKu クリスマス会（親子イベント）を開催

学童保育所京都大学キッズコミュニティ KuSuKu（クスク）では、2025年12月21日（日）に、親子で楽しむ「KuSuKu クリスマス会」を開催しました。

午前には、医学部人間健康科学科先端看護科学コースの学生と演奏家によるクリスマスコンサートを行いました。子どもたちが日頃遊んでいる遊戯室が、この日はコンサート会場に様変わりし、弦楽器とフルートが奏でるハーモニーが遊戯室に響きました。参加した子どもも大人もしばし耳



クリスマス音楽会



プレゼントを配るサンタクロース



ビンゴ大会



バルーンアート体験会



クリスマスケーキを食べる様子

大学の
動き

を傾け、心温まるひとときを過ごしました。また、子どもが指揮者を体験する場面もあり、手拍子をしたり、一緒に歌ったりするなど、音楽を全身で楽しみました。

午後には、サンタクロースがたくさんプレゼントを抱えてKuSuKuを訪れるイベントを実施し、子どもたち一人一人にプレゼントを渡した後、ビンゴ大会を行いました。会場となったミニホールでは、「リーチ」や「ビンゴ」といった子どもたちの歓声があがりました。

その後、子ども向けにはバルーンアート体験会、保護者向けにはKuSuKuの活動を写真や動画で振り返る報告会を行いました。イベントの締めくくりには、最後に参加者全員でケーキを食べ、一足先にクリスマス気分を満喫することのできる親子イベントとなりました。

(人事部(職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)

第4回現役留学生と卒業留学生が繋がる会「教えて先輩！卒業後の進路、そのリアル」(presented by 在日タイ留学生協会)を開催

本学では、今年度より、世代を超えた留学生間のネットワーク構築の支援を目的として、各国留学生団体との共催により、現役留学生(後輩)と卒業留学生(先輩)が繋がるイベントシリーズ「教えて先輩！卒業後の進路、そのリアル」を展開しています。

第4回は在日タイ留学生協会(TSAJ)との共催で、2025年12月8日(月)に国際科学イノベーション棟内linkhub@で開催しました。日本で活躍する卒業留学生2名をスピーカーに迎え、学部生、大学院生、研究生、日本語予備教育生を含む留学生など18名が参加しました。

冒頭、成長戦略本部ソーシャルリレーションズ領域が、本イベントの趣旨を紹介しました。続いて、在日タイ留学生協会会長のKaimuk Lhuengwongpaisarnさん(工学部・4回生)が、同協会の紹介とスピーカーへの謝意を述べました。

第1部のトークセッションには、国内企業に勤務するNatchanon Khurewattanakul氏(情報学研究科・2021年修了)とSenachakr Patraporn氏(経営管理教育部・2022年修了)が登壇し、就職活動や学生時代の思い出などを語りました。続く質疑応答では、現役留学生から



挨拶する Kaimuk 会長



トークセッションに登壇する Khurewattanakul 氏



トークセッションに登壇する Patraporn 氏

大学の
動き

就職活動のコツや企業での経験に関する質問が飛び、卒業留学生が丁寧に回答しました。

第2部のネットワーキングセッションでは、在日タイ留学生協会副会長のDom Roongruangさん（アジア・アフリカ地域研究研究科・2回生）の挨拶に続き、参加者が2グループに分かれ、交互に卒業留学生との交流を深めました。最後に参加者全員が当日を振り返り、学びや気づきを相互に共有しました。

本イベントを通じて、卒業留学生と現役留学生が対話し交流する貴重な機会が設けられ、参加者からは、今後もこのようなネットワーキングの機会を望む声が寄せられました。



ネットワーキングセッションの様子



会場の様子



挨拶する Roongruang 副会長



集合写真

(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)



京都大学国際シンポジウム 2025「アジアにおける地球環境学の教育研究に関する国際シンポジウム：持続可能な食糧システムと生活の向上に向けて」を開催

京都大学国際シンポジウム2025「アジアにおける地球環境学の教育研究に関する国際シンポジウム：持続可能な食糧システムと生活の向上に向けて」を、2025年12月2日(火)に、インドネシア・ボゴールのIPB大学を主会場にオンラインとのハイブリッド形式で開催しました。アジア諸国を中心に、27ヶ国91組織から研究者、学生、民間企業関係者など合計353名が参加しました。

シンポジウムは、田中千尋 地球環境学堂長、Ernan Rustiadi IPB大学副学長による開催の辞から始まりました。続いて、西前 出 地球環境学堂副学長、Ernan Rustiadi IPB大学副学長、縄田栄治 ASEAN拠点長から、学際的・国際的な見地からシンポジウムテーマに関連する3件の基調講演が行われました。その後の若手研究者や学生による地球環境学に関わる3分野 (Environmental Technology、Natural Resources、Global Ecology) で計62件のポスター発表を行い、実りある質疑応答が行われました。

午後からは、京都大学、IPB大学、バンドン工科大学、王立農業大学、ハノイ理工科大学、ダナン工科大学、フエ農林大学、フエ科学大学を代表する研究者によるパネルディスカッションを行い、各大学から教育・研究に関する国際連携の取り組みが紹介されました。続いて、本年度から新たに開始した国際共同研究プロジェクトに関して、概要説明と8件のプロジェクト紹介が行われました。最後に、ベストポスター賞の表彰式および河野泰之 副学長、Iskandar Z. Siregar IPB大学副学長による閉会の辞が述べられ、次年度ホスト大学を務めるハノイ理工科大学の Nguyen Thi Anh Tuyet 副研究科長からの歓迎の挨拶で本シンポジウムは閉幕となりました。



田中学堂長による開会の辞



Rustiadi 副学長による開会の辞



西前副学長による基調講演



パネルディスカッション

部局の
動き

本シンポジウムは、学際的・国際的な人的ネットワークを強化し、教育カリキュラムの向上や国際共同研究の推進に向けた重要な機会となりました。また、若手研究者にとっては研究発表や交流を通じて新たな視点を得る有意義な場となり、持続可能な未来に向けた協働の基盤が一層強固になることが期待されます。



ベストポスター賞表彰式



河野副学長による閉会の辞



クロージング



集合写真 1



集合写真 2

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↩](#)

令和7年度京大関係病院長協議会定例総会を開催

医学部附属病院は、2025年11月19日(水)に、「令和7年度京大関係病院長協議会定例総会」を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達および病院経営の合理化を企画することを目的として年1回、定例総会を開催しているものであり、学内外から約130名が参加しました。

部局の
動き

定例総会では、高折晃史 医学部附属病院長の開会挨拶、「京大病院の現状について」の報告が行われました。次に、矢部大介 同副病院長、黒田知宏 同病院長補佐、大嶋勇成 兵庫県立尼崎総合医療センター病院長、小川 修 大津赤十字病院長より各病院の取り組み状況についての講演がありました。続いて、高折病院長をコーディネーターとし、病院経営への取り組みや課題についてのパネルディスカッションが実施されました。講演者4名と前田明則 静岡市立静岡病院長、小松和人 福井赤十字病院長がパネリストとして登壇し、ディスカッションを行いました。

関係病院間での活発な意見交換が行われ、充実した定例総会となりました。



発表する高折病院長



講演する矢部副病院長



講演する黒田病院長補佐



講演する大嶋病院長



講演する小川病院長



パネルディスカッションの様子

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

想定外を引き受けた先の景色

橋寺 由紀子



今年には60年に一度の丙午の歳巡りである。丙午生まれの私にとって、「淮南子」の人間訓にある「人生万事塞翁が馬」は、節目ごとに胸をよぎる言葉だ。社会に出て以来の転機の多くは、周到な計画というより「想定外」から始まった。受け入れるほかないと思えた出来事が、時を経て前向きな意味を帯び、あらためて姿を現す——その反復が、私の歩みを形づくっている。

医薬品開発に携わりたい一心で入社した企業で、私は14年間、開発研究に従事し、担当した二つの化合物は新規作用機序の先駆け（ファーストインクラス）として承認に至った。開発一筋だった私が、上場担当としてマネジメントチームへの参画を打診されたのは、予想もしないことだった。現場を離れる不安はあったが、変わったのは目の前の課題であって、仕事の本質ではなかった。未解決の問いを見極め、関係者と共通言語をつくり、仮説を立てて検証し、前に進める。研究開発で培った姿勢は、上場準備や経営判断の局面でも変わらず私を支えた。6年後、自らがCEOとして上場を実現する立場に立つとは想像していなかったが、「受け入れるしかなかった」選択の積み重ねが、次の景色へと私を導いていた。

同じ頃、医薬品業界は低分子からバイオ医薬品へ移行する転換期を迎えた。次世代の医薬品開発に向けた学び直しを決意し、医学研究科社会健康医学系専攻へ進学し、翌年からはジョイントディグリー制度を活用して経営管理大学院で学んだ。学部卒業直後の学生、社会人、留学生、現役医師など多様な仲間との対話は、異分野が交差する場に新しい価値が生まれることを実感させてくれた。

2018年、米国のソーシャルインキュベータを訪れ、「技術で勝って、ビジネスモデルで負ける日本」に必要なのは、産学官と起業家が集い刺激し合うエコシステムだと確信した。翌年、大学近くでソーシャルインキュベータ「toberu」を起業し、社会課題に挑む起業家が4カ月の共同生活を通じてスキルとマインドセットを磨き合う場を運営している。想定外は避けられない。しかし、受け身で終わらせず、本質を見失わずに真摯に立ち向かうとき、次の可能性はひらかれる。京都に拠点を置くのは、優秀な人材、生活環境、産学官連携の厚み、資金調達の土壌が揃うからにはほかならない。起業家は未来を先取りする技術を社会実装へ押し出す牽引役であり、その挑戦を支える土台を京都で育てたい。京都大学で得た学びと縁を礎に、これからも挑戦の連鎖をさらに広げていきたいと思っている。

（はしてら ゆきこ、株式会社フェニクシー代表取締役社長、
平成24年大学院医学研究科社会健康医学系専攻修了、
平成25年大学院経営管理教育部経営管理専攻修了）

[目次に戻る ↗](#)

随想

研究用原子炉の「式年遷宮」

名誉教授 川端 祐司



複合原子力科学研究所は、1963年に原子炉実験所として「原子炉実験およびこれに関する研究」を行う全国共同利用研究所として発足し、2基の研究用原子炉を中心に運営されてきた。しかし、2026年4月末に主力施設である京都大学研究炉（KUR）の運転が停止される。これまで60年以上にわたって原子力エネルギー研究や放射線・照射性同位元素を用いた研究・人材育成に貢献してきた大型施設の停止が関係分野の研究・人材育成に与える影響は大きい。

また、研究用原子炉は、大量の中性子を定常的に安定して発生する装置として、いまだ広い研究分野で大きな役割を果たしている。そのため、米国やヨーロッパなどにおいても、各国ともに数は集約させつつも、基幹となる研究施設を整備し、関連分野の研究・人材育成のための基盤機能を確保する方針で運営されている。

このように必要とされる施設ではあるが、原子炉建設には地元の理解・協力が必要であり、さらに極めて厳重な安全性確保が求められる。特に福島第一原子力発電所事故によって日本の安全規制は世界で最も厳しいもののひとつとなっており、事故後から現在に至るまで原子炉の新規建設は行われていない。その結果、日本における研究用原子炉建設は約40年前まで遡ることとなる。原子炉建設が長年停止されたことによって、日本国内における原子炉建設に関するノウハウや必要な人材も失われつつあると問題視されてきた。

しかし、このたび、福井県敦賀市において待望の新規研究用原子炉の建設が決定され、現在、日本原子力研究開発機構（JAEA）が中心となって設計が進められている。また、研究用原子炉を活用して行う広範な研究・開発については、京都大学複合原子力科学研究所が研究全体に対する責任主体となり、とりまとめ役として全国的な開発検討体制を立ち上げ、多くの中性子利用研究者の参加を得て、世界的に見ても最先端となる高性能実験装置実現に向けた開発研究を進めている。

研究用原子炉は研究施設であるため、当然のことながら最新の研究動向に対応し、最新技術を取り入れることになるが、原子炉のように堅牢な安全・確実性を求められる施設では、長年積み上げた経験やノウハウに裏付けられた確固たる基盤技術も重要な役割を果たす。このような継続すべき技術の確実な継承手法としては伊勢神宮の式年遷宮が有名であり、世代ごとの建設が人材をつなぎ、確実に次世代に技術を継承させる日本の知恵と認められている。

前回の研究用原子炉建設に若手として参加した人材が、定年前後となりながらもぎりぎり間に合うという状況の中で、研究用原子炉の“式年遷宮”がなんとか間に合ったという思いと、若手・中堅が魅力的な研究炉施設の実現のために生き生きと活躍する姿を見ることができたことに大きな喜びを感じつつ日々を送らせていただいている。なんとありがたいことであろうか。

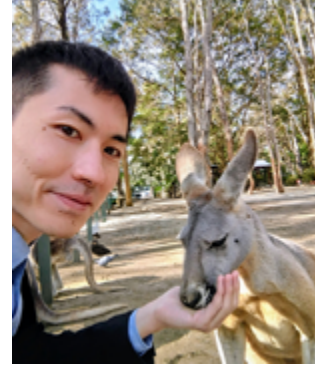
（かわばた ゆうじ、令和4年退職、元複合原子力科学研究所教授、現在は同研究所特任教授、専門は中性子物理学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

「人は野球に夢を見る」

天野 良明



球春到来。野球ファンの待ちに待った季節です。今年はWBCの熱気も追い風に、国内外で長いシーズンが幕を開けます。

野球ファンであってもなくても、学生の方にお勧めの映画を聞かれたら『マネーボール』を挙げることにしています。映画のもとになった実話の舞台は2000年代初頭ですが、今でも多くの学びが得られる物語です。

映画のあらすじを簡単に。ブラッド・ピット演じる主人公ビリー・ビーンは、メジャーリーグの弱小球団、オークランド・アスレチックスのゼネラルマネージャーです。彼は、経済学部出身でデータにめっぽう強い青年、ピーター・ブランドを右腕に据え、球界の常識を覆す改革に乗り出します。それは、徹底的にデータを重視して選手を評価・補強するというものでした。他球団が見向きもしない選手でも、データ上でチームの勝利に貢献できると判断すれば獲得する。この「セイバーメトリクス（野球統計学）」を用いた戦略で、アスレチックスは低予算ながら、強豪ひしめくリーグの中で快進撃を繰り広げます。

この映画の最大の魅力は、「合理性」と「非合理性」の両面を描いている点です。データに基づき理詰め改革を進めるビリーたちが直面するのは、極めて人間臭い葛藤や衝突です。数字は冷徹な事実を突きつけますが、その数字を見て悩んだり、抗おうとしたりするのは、時に非合理的で、夢見がちな人間自身です。

映画の舞台からおよそ25年。野球に限らず様々な分野において、AIやビッグデータを用いて意思決定を行うことは常識となりつつあります。しかし「数字は人を動かすが、最後に決断し、動くのは人自身である」というこの映画の教訓は、テクノロジーが急速に進化する現代だからこそ、より一層大切になっているように感じます。

さて、私の専門分野は財務会計です。企業の財務数値や株価のデータをもとに、経営者や投資家の行動を統計的に分析する研究をしています。会計と聞くと、「細かいルールに従って計算するだけで退屈」「数字ばかりで無味乾燥な世界」というイメージをお持ちかもしれません。でも実は、野球におけるセイバーメトリクスと、とてもよく似ています。決算書に並ぶ数字は、記号の羅列ではありません。その背後には、企業に関わる人々の様々な心理や行動様式が隠されています。数字を通してそれらを「推理」するのが、この分野の研究の醍醐味です。

この春、入学・進級・卒業される皆さん、春休みの間に『マネーボール』をご覧になってはいかがでしょうか。そして、もし「数字で世の中を見るのも面白そう」と思っていたら、その足で書店へ向かい、財務会計の入門書を手に取ってみてください。映画に負けないうらい、わくわくする研究分野であることを実感していただければと思います。

注：表題は映画『マネーボール』より。

(あまの よしあき、経営管理大学院准教授、専門は財務会計・M&A・企業分析)

[目次に戻る ↗](#)

話題

本学卒業生の畠山丑雄さんが第174回芥川賞を受賞

1月17日(水)に芥川龍之介賞の選考委員会が開かれ、畠山丑雄さんの『叫び』が受賞作に選ばれました。

畠山さんは、2015(平成27年)、本学文学部在学中に『地の底の記憶』で第52回文藝賞を受賞しデビューしました。地方公務員として働きながら小説の執筆を続け、2025年(令和7年)には『改元』で第38回三島由紀夫賞候補となりました。

畠山さんの今後のさらなる活躍が期待されます。

湊長博 総長のコメント

このたびの栄えある受賞にあたり、京都大学を代表して、心からお祝い申し上げます。

畠山さんは、本学文学部で読書や執筆に目覚め、在学中の2015(平成27)年に『地の底の記憶』により文藝賞を受賞されて以来、文芸界のトレンドをあまり気にすることなく書きたいものを書いてきたと仰っています。

今回の受賞作『叫び』は歴史と時空を超えた壮大なスケールの物語ですが、トレンドに乗ることなく、自らトレンドを作ったその姿は、まさに本学が伝統的に重んじる独創性の賜物であり、深い感銘を受けています。

一昨年の万城目さんによる直木賞受賞に続くこの榮譽に、本学で学ぶ学生諸君をはじめ、関係者一同、信じる道を貫く勇気と力をいただきました。畠山さんのますますのご活躍を期待しております。誠におめでとうございます。

【関連リンク】

芥川龍之介賞 | 公益財団法人日本文学振興会

<https://bungakushinko.or.jp/award/akutagawa/index.html>

(広報室)

[目次に戻る ↗](#)



畠山丑雄さん (写真: © 新潮社)

令和7年度広報連絡会を開催

広報室では、「学内の広報担当者の専門性向上と、広報担当者同士の横のつながりや連携の強化」を主な目的に広報連絡会を開催しています。今年度は計5回開催し、年度初めの第1回に広報を初めて担当する職員向けにオンデマンドで業務講習会を実施したほか、第2回～第5回では講習やワークショップ形式でも開催しました。

第2回は、西山 伸 広報担当理事補(大学文書館教授)を講師に、「京都大学百二十五年史はどのようにして作られたのか」と題し、「京都大学百二十五年史」の編さん過程の紹介を通して、本学の歴史について、広報の視点も交えながら講演いただきました。講演後は、会場である医学部構内の施設見学として、医学部資料館とがん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟展示室を見学しました。アンケートでは、「広報には組織のアイデンティティを確立する側面もあることを再認識しました」「視点が広がることができ、有意義な時間でした」などの感想が寄せられました。

第3回は、今羽右左デヴィッド甫 広報室国際広報班長を講師に、京都大学学童保育所

話 題

キッズコミュニティ (KuSuKu) で、研究広報の最前線を考えるワークショップを行いました。AltmetricやNonobonなどを活用した講演のほか、KuSuKuの見学も行いました。参加者からは、「広報には組織のアイデンティティを確立する側面もあることを再認識しました」、「日常的な言葉を複雑な専門用語にすることで誤解が生じ、問題に発展する可能性があるという点が勉強になった」などの感想が寄せられました。

第4回は、宇治キャンパスで、本学卒業生で、民間企業と私立大学で広報実務を経験してこられた、尾崎幹男 広報室アドバイザーにより、『マイク尾崎の広報教室—「表(おもて)の広報」「中(なか)の広報」「裏の広報」—』と題して講演いただきました。このほか、本年に創立100周年を迎える化学研究所の歴史に関するミニ講話「化学研究所百年」(西山理事補・教授)と施設見学(化学研究所「碧水舎」と生存圏研究所「材監調査室」)、さらには参加者相互の日頃からの連携のきっかけ作りも目的にした交流会も開催しました。

参加者からは、「京都大学としての広報をどのように行っていくかの指針について知るうえで参考になり、また励まされるものでした」、「自分の知らない話を聞けることは大変勉強になります。講師の考え方やその時の環境等、いろいろな状況により、今後の自身における判断材料の参考になると思います」「民間企業での経験談につきましては、そこにいなければ知ることのできない貴重なお話を拝聴できうれしく思いました。また、私立大学でのご活躍の様子や実績も大変興味深く、どういうふうにと工夫の具体例を見せていただき、大変勉強になりました」などの感想が寄せられました。

第5回は、成長戦略本部との共催で行いました。「社会と大学とのインターフェースとして新たな価値創出を目指す」という成長戦略本部の組織目標と、これを実現するための取組紹介(同窓会、基金、スタートアップ、産学連携等)の後、グループワークの形で参加者相互の意見交換を実施しました。参加者からは、「成長戦略本部をこれまでより知ることができ、大変ありがたい機会となりました」「部局、センター等の具体的な広報活動や方針についてももっと知る機会があれば幸いです」などの感想が寄せられました。

今年度の広報連絡会は、多くの参加者から「大変有意義」または「有意義」との回答があり、学内広報担当者の学びを深め、相互に交流する機会を提供することができました。来年度も、これまでのアンケートで寄せられているご要望にも応えつつ、定期的に開催していきたいと考えています。

なお、今年度の各回の概要は以下の通りです。

第1回

オンデマンド開催

内 容： 広報実務講習

講 師： 広報室

第2回

開催日時： 令和7年7月24日 13時30分～15時(対面開催)

内 容： 京都大学百二十五年史はどのようにして作られたのか

講 師： 西山 伸 広報担当理事補(大学文書館教授)

参加者数： 51名

第3回

開催日時： 令和7年12月22日(対面開催)

内 容： 部局研究広報を考えるワークショップ：課題、ヒント、そしてブランド力

話題

講師：今羽右左デヴィット甫 広報室国際広報班長

参加者数：30名

第4回

開催日時：令和8年1月26日13時半～16時15分（対面開催）

内容：『マイク尾崎の広報教室—「表（おもて）の広報」「中（なか）の広報」「裏の広報」—』、「化学研究所百年」

講師：尾崎幹男 広報室アドバイザー、西山 伸 広報担当理事補（大学文書館教授）

参加者数：24名

第5回

開催日時：令和8年2月18日13時30分から16時

内容：世代や国境を越えた「京大コミュニティ」の共創、歴史ある“京大人文知”の社会展開、（分野特性に応じた）産業界との協業・スタートアップ創出

講師：三橋 紫 成長戦略本部統括事業部ソーシャルリレーションズ領域特定職員

香月亜美 成長戦略本部企画管理部上席イノベーションプロデューサー

稲石奈津子 総合研究推進本部URA（兼）成長戦略本部企画管理部

大槻弥登 成長戦略本部統括事業部イノベーション領域特定職員

参加者数：29名



第2回広報連絡会の様子



第5回広報連絡会の様子

（広報室）

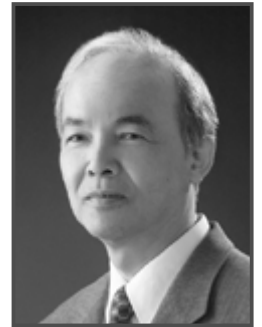
[目次に戻る ↗](#)

このたび、森澤眞輔 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績などを紹介します。

森澤 眞輔 名誉教授

森澤眞輔先生は、令和7年12月15日逝去されました。享年79。

森澤先生は、昭和44年京都大学工学部衛生工学科を卒業、46年同大学院工学研究科修士課程を修了、同48年同博士課程衛生工学専攻を中退、同年4月同大学工学部助手に採用され、同53年1月に京都大学より工学博士の学位を授与され、同年4月に京都大学工学部助教授に昇任されました。平成7年には、同大学工学部附属環境質制御研究センター教授に昇任し、同センターの環境質評価分野を担当されました。同8年同大学大学院工学研究科環境地球工学専攻に配置換となり、環境リスク工学講座を担当されました。同15年には、同都市環境工学専攻に配置換となり、環境システム工学講座環境リスク工学分野を担当され、同19年からは同環境デザイン工学講座を担当されました。同23年に同大学IPS細胞研究所特定拠点教授に就任し、同28年に退職されました。この間永年にわたって学内においては、学生の教育と研究者の指導にあたり、多くの人材を育成されました。



先生は、環境リスク評価、中でも放射性廃棄物地中処分の安全評価に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、土壌・地下水汚染管理等の分野において多大な貢献をされました。これらの研究成果は、230編の学術論文にまとめられ、国内外で高く評価されています。主な著書に『土壌圏の管理技術』、『環境の汚染とヒトの健康—健康のリスクをどう防ぐ—』などがあります。

学内においては、工学研究科運営会議構成員、工学研究科副研究科長、教育研究評議会評議員、先端技術グローバルリーダー養成ユニット長を務められました。学外においては、日本学術会議社会工学研究連絡委員会委員、日本学術会議社会環境工学研究連絡委員会委員、日本水環境学会関西支部長などを務められたほか、文部省学術審議会専門委員、文部科学省最先端分野学生交流推進制度選考委員会委員なども務め、学術・環境行政に尽力されています。海外においても、多くの国際会議・調査などにわが国の代表として出席し、国際学会誌Journal of Environmental Technologyの編集委員やマレーシア理科大学外部評価委員を務められたほか、JSPS-VCC国際セミナーを主催するなど国際的学術活動にも力を尽くされました。

以上のとおり森澤先生は、42年間にわたり環境工学や放射線衛生工学、特に放射性・一般廃棄物管理や土壌・地下水汚染管理などの分野において、斯学の進歩に大きく貢献されました。また新領域としての環境リスク工学の発展において常に指導的役割を果たしてこられました。これらの功績は誠に大きく顕著なものがあります。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)